

ヒガシヒダサンショウウオ *Hynobius fossigenus* Okamiya, Sugawara, Nagano et Poyarkov

【選定理由】

Okamiya et al. (2018) によるヒダサンショウウオの分類見直しに伴い、本県でこれまでヒダサンショウウオとされていた集団のほとんどは別種ヒガシヒダサンショウウオとして扱われることとなった。本県における生息域は狭く、河川環境やその周辺の森林環境の悪化による減少が懸念され、近い将来絶滅危惧種に移行する可能性が高い。

【形態】

体サイズは地域によって大きな変異を持つが、豊田市稲武町の雄の頭胴長平均は 72.0mm (最小 64.6mm、最大 77.6 mm)。前肢に 4 本、後肢に 5 本の指を持つ。体色は紫がかかった暗褐色で金色または黄色の斑点を持つ。近縁種のヒダサンショウウオと比較すると、体サイズが比較的大型であることや、鋤骨歯列が幅広で深い U 字型であること (ヒダサンショウウオは V 字型)、上下顎の歯の数が多いこと等の点で区別できる (Okamiya et al., 2018)。ただし、愛知県の集団 (旧稲武町産) は、遺伝的には本種に含まれるものの、計量形態学的に解析すると本種よりむしろヒダサンショウウオに近い特徴を呈することが知られており (Matsui et al., 2009)、今後詳細な比較が必要である。

【分布の概要】

日本固有種。本県以東から関東地方にかけて分布する。基準産地は東京都。本県下では設楽町、豊田市 (旧稲武町、旧足助町、旧下山村)、豊根村の標高 600~1,100m の山地溪流の周辺に生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

溪流の源流付近を中心とした森林の斜面に生息する。産卵期は 2~3 月、源流部の岩の下面に 1 対の青みがかかったバナナ状の卵嚢を産む。一腹卵数は設楽町の個体で平均 21.1 (見澤・榊原, 1999)。幼生は通常年内に変態し上陸するが、一部の個体は幼生のまま越冬する。上陸した個体は湿度のある倒木、岩、落葉などの下に潜み、小型の無脊椎動物を捕食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

天然林では生息密度が高く、人工林では低い。砂防ダム下流域では生息数が少ない。新しい砂防ダム建設により、コンクリート打設に伴う水質変動が拡大することによる幼生生育域の減少が、個体群の縮小を招いていると考えられる。

【保全上の留意点】

山林内の林道工事などによる土砂の流入や砂防ダム建設時のコンクリート打設に伴う水質変動、大規模森林伐採による環境変化など、事前の調査と検討が必要である。

【特記事項】

本県の個体群は本種の分布域の西限に相当し、近縁種のヒダサンショウウオと分布域を近接しているだけでなく、一部の形態的解析においてヒダサンショウウオに近い特徴を呈するなど、生物地理学的に興味深い集団である。

【引用文献】

- 見澤康充・榊原圭志, 1999. 愛知県産ヒダサンショウウオの一腹卵数について. 豊橋自然史博物館研究報告 9: 33-34.
M. Matsui, Y. Misawa, K. Nishikawa, 2009. Morphological variation in a Japanese salamander, *Hynobius kimurae* (Amphibia, Caudata). Zoological Science 26: 87-95.
H. Okamiya, H. Sugawara, M. Nagano, and N. A. Poyarkov, 2018. An integrative taxonomic analysis reveals a new species of lotic *Hynobius* salamander from Japan. PeerJ 6: e5084.

(島田知彦)



豊田市稲武町 (寧比首岳), 2017 年 3 月 21 日, 島田知彦 撮影

県内分布図

